

次に記載されている文章は、筆者の校長が石澤奨学会の『私達の明日』第五集(平成28年3月25日発行)に寄稿したものを一部訂正加筆したものです。筆者が自らの青春時代の思い出を記したものです。ここには、私がなぜ教育の道を志したか。中学時代の担任からいく学校がないと言われたぐらい勉強ができなかったのに、どのようにして大学に行くことになったのかが記されています。皆さんの少しでもお役に立てればと思い、記しました。

### 青春時代を回顧する

私は、平成27年4月1日に神奈川県立川崎高等学校の副校長に着任しました。今から40年前、横浜の市立中学校卒業し、あまり勉強が好きではなく、学習成績も芳しくなく(ほとんど2という評定)、経済的にも恵まれず、中学校の担任から「田中には、いく学校がない」と言われたので、中学校卒業時に川崎の町工場働くことにしました。勤務した工場の人から「高校ぐらい出ておきなさい」という一言で入学しました。この川崎高校の定時制の門を叩きました。会社では同世代が一人もいなく、生活も楽しくなかったので定時制に進学したのです。

川崎高校の所在地は川崎区の臨海部に在り、大手企業や中小企業の工場などが点在し、当時は中学校卒業生が「金の卵」と称されることもあり、生徒の多くは勤労学生でした。工場、病院、デパート、市役所、商店等で働くものなど、いろいろな職業、職種の人たちが集まっていました。また、私のような川崎や横浜出身は少数で、多くの生徒は九州や東北など地方出身の方が多かったと思います。さらに15・16歳のものだけでなく、20歳前後の生徒が多く、40・50歳代の生徒も何人かいました。

定時制に入学してみたものの、朝早くに起床して昼間は働き、夜の授業は身体的にも、精神的にも辛く、なかなか授業に身が入りませんでした。疲れて寝ていたことも何回もありました。ただ、多くの人たちと触れ合うことで充実した毎日を送ることができるようになりました。毎日、皆と会えるのが楽しみで、仕事を終えて直ちに高校に行き、食堂で50円の定食を食べながら学友と談笑したことが忘れられません。仕事のこと、将来のこと、家族のこと、異性のこと、遊びのこと、趣味のこと、車のこと、今の高校生と基本的に変わらない話をして日々を過していました。

学校行事等では、球技大会でソフトボールをやったこと、文化祭で野菜や焼きそばを販売したこと、夜間照明を点灯させながらの体育祭で走ったこと、修学旅行がなかったので友人との卒業旅行で富士山に登ったことなど、いまでも昨日のように脳裏をよぎります。

そのような高校生活のなか、私の人生を変える一人の先生に出会いました。当時、定時制の先生方の人数が不足していたのか、教頭先生が世界史を教えてくださいました。その教頭

は授業中にいろいろな話をしてくれました。ダンテ、ダビンチ、ナポレオン、リンカーン、ヒットラー、ルネッサンス、市民革命など、いろいろな話をしてくれましたが、仕事に疲れて授業中に寝ていたり、聞いていなかったりしていました。

教頭は、世界史のテスト前「教科書、ノート、辞典、何を持ち込んでもよい」と言われました。そのため、皆、テスト前に勉強もしないままテストに臨みました。テストを見ると大問2題、記述式の問題でした。その出題は「ナポレオンがヨーロッパに残した遺産について述べなさい。」というような内容でした。予習復習、テスト前の勉強をしていなかったのも、ほとんど零点に近い桁の点数しか取れませんでした。

しかしながらこのテストを受けたことで、私の中に潜んでいた反骨心に火がつき、何が何でも点数を取ってよろうという意志が芽生えました。なぜ、点数が取れなかったのか、どうすれば点数を取ることができるのか。いままでの自分には無かった気持ちになり、なぜ間違えたのか。間違えた箇所を見直し、理解するように努めました。そのため、毎日毎日、夜遅くまで図書室の世界歴史大辞典（出版社、正式名称は忘れましたが）の前に席をとり、ゴシックで記されている人名や事件名、戦争名などを一つひとつ調べながら、勉強しました。そのおかげで、世界史で優秀な成績を取ることができました。自分の脳裏のなかで、抽象的な概念を理解したりすることや、自らの世界観が広がったような気分になって、勉強や学問の楽しさや面白さを感じるようになりました。教室、図書室からの臨海工業地帯の明かりや、羽田空港に離着陸する飛行機の姿を見ながら勉強したことは、いまでも忘れません。また、その教頭の影響を受け、学校の先生を、それも社会科の教員を志すようになりました。

ある日、職員室に行くと、その教頭が私を呼び寄せました。そして「田中、お前に、この奨学金をもらえるようにするから、頑張って大学に行きなさい。」と言われました。その奨学金こそが石澤奨学会の奨学金でした。月々いくらの奨学金(何か 9000 円という記憶があるが...)を頂いていたのか忘れてしまいましたが、この奨学金が送金されるのが待ちどおしかったことを、今でも覚えています。

高校卒業後、2部の大学に通いながら教師を目指し、無事4年間で卒業しました。そして教員採用試験に合格し、教員生活を送るようになりました。何度も自分の母校に勤務したいと思いましたが、なかなか実現することはなく教員生活を送っていました。なかばもう母校での勤務はないと思っていました。

いま自分が副校長として母校に勤務することになり、川崎高校への異動辞令を聞いたときは、感無量で何と表現していいのかわかりませんでした。今年度に入り副校長として久しぶりに石澤奨学会の名を聞く機会があり、現在の自分があるのも、石澤奨学会をはじめ皆さんの暖かい支援によるものだと思います。改めて感謝いたします。

いま還暦になり、ようやく人生を振り返るチャンスをもたらされたような気がします。でも、あと20年、いや30年も生きていかななくてはならないので、まだまだ青春です。